五次燒
利
14
3157
16(3)

14
3157
16
(3)

帝室博物館

水府彰考館

坂東藏書

是ゟ別して揚貢を次
立ての心ハ英雄乃臣を以
て弛ざるを所 神妙也
卯境の条ゟ第一
成功ゟて白綿つきの
放ちゟ東ハお坂山南ハ
立田西ハ宍生小ハ有乞
乃鎮護をたゝそ先一ツ
の形書を認ゟ
治雞坊乃何某筆を
取て田饒ゟ詞をかゟ蘇
祭ゟ謀を顕して神明

納受の志を乃ふ
南の清水を
まゐらして頂禮
ふうとを

三十六合

春風和かにもゝ家雞乃麾
二字よし
佛節會ふ當ちを
是ふうをの音乃新手歌仙
乃左坐ほのゝと明ふる空の天鶏

て療をふうをの軍配い云
曲をつくれふうと
右ゟて
ふうとんすて旅下ふりとを
ふる家鴨乃立居
牝雞乃朝夕をつまく押ふ
留主居役下付
附ふう其身の立居重く大
声をあて勤番ゟ也
道戯てあれる傳兵おとて
ゟ乃笑ひを
なふうとの

桃花雨をは竹の葉乃みさゝ礼足　其角

二字ト六

五六間処てふ雨乃尾吹ル

乙字ト次

清明の節大雨ふりて思ひ

敗軍次稲麻竹葦に入乱

れてもの寂しき尾吹乃ふかう

何ものゝ去ぬる落書

雛去テ昼竹葉ヲとりふさを書

捨ふり昼ハ五山汎の僧雪乃

聯句ヲ犬走生ニ梅花ヲといへる

對たるをとゝ桃花雨ふるをりく羽翼

ハ醜しとゝ

男涙乃ようてゝ尾ヲ語ヲ

乃鼓立ゝそ

廿八合

白綿付乃黒て仕て取ル巳日ヶ

乙字

桃節ヲつゝじほとゝぎす

異出乃男白綾のふんどし

先行て宿を出るに
カまねきおくる酒陶朱公ゆるす
立髪杖乃葉にちるみなし胴骨
つんつんとして卯斗樽のごとく丸く
ふくらう桃花の酔ちゑと巳乃
日の精を絞力量いく〳〵なるん
卅九合

くゝ 水胴庖をしる 鳥甲
捕距此と
爲問て色並をなす 擽あお 素琴
乙字
中入一をすゝめるる小女房乃

後ゑん寺心得ぬ業也冨士の煙
乃かひ和るあるん力かひちく歯うみ
きうをもと北雞晨治ゑ」と
ゐさはいるこゝとをゑ 伝ゑ家も
らく先ゑうを売必ゑるとい〻る詞を
おうそれ擽もゐをつけてはく
しおるー力乃出る寂体なるを
四十合

茶篦尾ゑ鍛をたくいさみのゑ 習奥
左右乙字
流ゑまゑ當ゐ 距於其角

男寒相撲急ぐ事あり
味ひつゝうつゝともなく
空肺してつきたる灸手もあり
それ不可乃心うけ引ともより
なげて未意をを也
ハッ立七ッ起八間乃関乃東の兵
卯十二合

兵と書もなをトゝ呼ル 何牡
二字ゟ
足田鶴乃鶫ロ也乃負て勝
桃李不言乃詩兵と糜美の上

茶瓷壁にうつる尾ヶ
二十二番乃おこ色も手弱き
方也てなをしの雑言ヲつゝ
前口ゟ色
四十一合

鼻ふさを味方へ引ヶ番 椒 雪花
ゟと
油肝殿空肺ハてうゟ庭 莖
二字
蔵を乃水ゟ舌ゟ三伏の番椒
に鼻の汗次辛烈乃氣多ち
頂平へ面してあふ血のるゟる

甲十三合

いそめき木乃芽をもやす距尓右此

胡葱なおもよし二字ともに誓古岡

是彼子用申為もなりねと

雞乃坊主のごとき若なり尓 爾指

先蹤正しかれい双よるを申

垣を為てし岡を合すれこそ

ならめとその人まもまめ家をも

右小時節おもひ應乃むもし世也

うら世界来をもし付しる一言誠な

かしけ尓ト二とのひ出されて

栈鋪より此花をこ尓乃り

足田乃野の中来い伊勢の国

ふ乃裏かねもりきしあくるふ慈鎮

はふなのせてもふ洗いはりなり

成乃高さた松詞を置れくり

鶯花のともいひつけ侍るとも和

きこゑつうら花のあをそも

綿をる乃しの評判かくら

時家乃ふ世界まかくらる

味噌ばかりおくれ
ひとつまみの柱得自然すくく
ぬるひなかんく入河津殿の供ふみ
一万箱王毋ふのこゝろ甘い母勇を
備えて母衣ともり羽織をきせ
ゝりたゝく樊噲をまねむ
まゝよの下ぬ
卯十五合

血盲乃幾疸宮ゝ祖宮ゝ宮ゝ耕篭 樟孤
也
尾雫も緋桃ゝ挑ゝ挽てゝゝいう百猿
二宮ゝ

頁手八味噌をつまむとりも
いゝてきゝ巧言世方この糜態呆
ものうそていはゝ酢乃過きるると
罵られのうまうそれうまう

砥味噌
廿四合

八乃字ゝゝゝの寄まて警醒
左右乙字ゝゝ
爨利を毋ゝひのゆゝ虻刺ゝ弓手
酔とりひさゝもとりゝ好悪の
詞ゝて心ふこうりなゝゝ

雞籠乃山脈ちんとうる日我
去ら次圖こ…てうち午音を
啼一うつをみ…し蜜柑の皮青の
網代の垂布をかう籠に入れ
是をつくして三羽と知る口惜かり
血盲也若武者ふたりも見午
かけ行るもをの一冠をきそ出を
て紅桃乃衆もねもとも一羽
冠重呉天雪ふそかうて
楚地乃花ももをしこ
かとい逆て後いうちん
甲十六谷

撫徐を北羽乃
二字ふ
南京乃引音を猛午水中空毎閑
天王ちの指徐後記みこ
所大坂矮雞の尾手に
ふしーうう今ともも尾羽の
鳴尾をーう白すこも燥
是源氏の嗣こ南京の小太布
治久ふあと…いそれて尋常午
引音を…大勢を合けちふ
中あれい水天をのて午ち路

乃友うみたち関路の客も
声くにすまし神
卯十七合

足病乃かしは事や 喘 疲 花月
七字
朱冠癰に润つ三月待れ客
烏医卯の曰足やみ乃いき手
喘折 失盡てきむ方
是當分乃弱き至い手なるよ
おつかうろの冠癰希宵に
一そ六ケ補亡病や営皇を痲

鷹氣欝に寒苦鳥亂客乃
多くい良薬を得多一此客
みて此病なるを漢家乃
あ一至癰卯の書第に
て多をよるる命運を全一て
きそく軍すねて
四十八合

鳴を蹴て已を負一時気 喰 笹外
て字
雞鳴二人静を合をり
鄭冠文よ

静
二人
十九日

沼津より足高山へ大櫓立朝
もとより雑木
多くして血脈原吉を
二人より関取乃
清次郎
かきて宿とす
共にみかん
名言を君
まことにて同
おくりなる人

此北負
迫
陰
なる
棟嬬
乃
ける
大
放
美雑
貫
合

作る芳野唐土もろもろ
翅の薫物しめやかに花紅粉化粧して
迷をとかぬ心をかしこき後法度の命と
もろもろみな放ちやりぬかの
篇小の美しきをあけくれなのそめる彩
身のうちをあけてをかしき音もものれる
とりかまてをうつをみ乃哥也此心もろもろ
とそ

五十品

勝品ハ推ろも啄ろも靖て門
戴冠文トス
傳大士を雞鷺うをひろ跪合依以
今ハ寺こ乃雞を召ハ推敲
三年の執ありすて推ハ力啄り
ハ品也韓退之是を相手
て以鳥鳴春と世上一ふりさを
らもこ乃輪廻乃三昧う
ありきあそをそんし訓て空ハの
きいて場もしろとんつをつ
乃狂ひろうをつ笑へ

五十一合

拍手のかつ色をかへ八臭習辰下
左右手とる影隔
尾

社頭ノ雞かすき寄合此
をまつたんとの拍手う松柏の
霜の後をもとるも各浪入
角力なれは笑ものあり
神山乃拍乃平手うちてき
樂番もの
五十二合

唯ゐの血臭ひ嵜を化雪花
五字
順翠凡赤さう酒乃いとかも雪花
捕距武
片名卅さまも足言しかる業を
得て舞ふ者とひ瀧とひ傘
りてうつ木冠きもも
月うち歩り順匂
此鬼酒を力共かれハ佛力
さらひ神力
あるよ
十二

五十三合

仏玉之深ね洲之ゑ勝
左右乙字
筋脖乃破軍玉

仏玉の名きら浮母洲んて狩
ひ狩狭孫ふ乃てんとう筋晴
仕吐角ふ星ひり狩きひ
手合乃ふ走助る
花とな桃花ひ陣をアす
とのゑ

五十四合

引色も日比の煤乃塘鵜ゑ
五字
相違羅乃勢を越ゆ花曇り習奥

ひくれ巻ま軋の夜乃月
羽毛とかよ詞正廣ら
日頃の袖てとらひ引合と
向上ひ仏ふと雑人暁ゑ唱ふ
数声明王の眸を驚う
ちふもお違乃花軍
一も千そ千合をふらは心も
とまるゑ

五十五合

雞頭乃追手ふ粱の紅粟ふ 分分

也

土餅ふ豆腐ふ君よ歟 鳶子

二對乃名目ハ立ふふ君よ歟

はゐもつふ所なり是ふ

雞ふ如同ふきしの紅葉頁

とゐふふ丈品ふれ物ふ

紅葉烏鹿ふかふふてふふ

新參の圀者場ふ食ひてを

乃うとふふふふ力 繁

角乃ふ如他ふ

餅とふふ豆醬の和ふふる

蕷蒭の白ふ

五十六合

時下に後悔も

こ字右二字

堝也乃服を瞞の鉄輪ふ

むふふる樽ふ

て瞳ふふん物目をふふ

度ふ也ふ

時下ふふふふ

百積

跪合的

空腹の際召食後稍す
三足のかゝと輪なる世の中の常
あのにもかゝてもむくをもや
動をゝゝみぬ中古野出の三郎
と云もの片腕をもらひ骨を
皮引かるゝてんぐのかゝしを
駈もて肚の程より引切て捨
ゝゝ素ぱらと片枝と早ス
此意地なきものかゝしを
五十七谷
穴ルヤ木乃根撰や若干合其角

砂水ふき
捕距武 島を古湘江
是ヤ木の根なてゝ猿の方のいし
ヲ貝殻なてゝも道理古湘江
昔仮ヱ乃虚織をしめつゝ
邪慢気ゝ手ふつゝと三番打
ゝゝ男をみゝゝいう
難や
五十八合
雌ゝ毛虫を捌く羽癖や泰
也

いさかひの別まで唱ふ昼下り雪花

潛確類書に雞に喫酒を以
酒を飲ませ甘妻醉臥奥の羽癖をつく
ゐてもてなすこと
ゐる五一回るまで茶白
ゐるかとん
右は樂色がもたらすこと
早天から仕事物待如郎
なる別まで用力揃ふまでいふ
なる別まで唱ふ昼

五十九合

風夏乃つまみ一個 其角

也右乙

餘年ある独ねねや雄乃役

甲の赤ゐ毛をつみ上る繪
首隠ぬ鬼也こゐに
野る伏山で卽る白ゐの毛
に染てかつのを分るあて
究竟の五忽に尻おもて一つ張る
舞のうそたまきうまて

飄驚くくる風情
苦〳〵

六十名

獨樂
戴冠文と左右五字ヅヽス
ちわお王ハ小結ヨ連ムまま
髯
白樫

獨樂
章弧天乃一名ともよ
引廻しともよの下界ふり指よ
ちなまくる腸を突て絶
入さう溜ゐ大独楽乃
うとくと泡とさそ

花の惣一
わいけしもの
てまさって肝をなくなる
六十一台

雑合わせ

髪ゆの厄かう
十字
噴にもなゆと

鳥伯樂
舞

七乃前迄はなりなくく
真黒ゐ毛瞳関内もと
怖意をゆのふむり仰ゐ乃
ムとおけ乃毛毛口世界

国土平均
次伸暖憲心をつくして相
をつくす伯楽乃煉磨也
さるこ乃手入今日のごとき不當坐はよ
話をかさり立さる化なるそれく
夫ふもさも化なるそれく
鵬乃餅こ
六十二日

我すの居を相手やせつ岡
こまおとこ
今日の関竜を狂ふやかに崎芳
五字こそ

伊勢町小田原甲雞火ともの
中何く木戸をを限つて恥含
童僕の心もも亦去かりうめく
獨遊びをすれば惣くのなふ
含て呉越乃名主を煩らは
江戸気すて鬼近にくそ肥る
ゆくへ也
或人乃いふ信濃の国大笑也
廿卯もの年女なりとぞいふ
乙巳越後乃国荷を荷ひもて

川中島乃合戦ハ
龍虎乃成漢楚の争ひ是
を末世の咄とす
六十三合

駿白をそろへ矢壺〳〵名 辰下
乙字
抱分て仁乃字ハ雛ハ酒 百之
たゝく箭合也をのゝ〳〵
羽に札安一名を放をそろ〳〵
なるものゝ一もおよ
多掛りつゝ
なるや喰ふ

乱ぬ礼ハ抱分くるまの
老ふ仁のをそろへ
ひゞくりに成しハつゝ
盃者ありうち心をゝ
油ハ大敵
六十四合

塀をゝ乃いさゝ
乙字
碁盤もしくハ亜谷へ蒲三五郎
塀をゝ乃ゑ乙字
他の悪黨をそろへ

桃乃花振ひ立朝

羽多比羽形なるべく

難波比羽は名二羽とも番へ

六十五合

尾狂子お話となる逆毛ある

左右七字

蹴廻しや浅黄おもて円士軍　雪花

尾狂子のはしくや逆毛ある

雛乃獅子ふさ尾狂子の未練

此句ところのもやう也尾狂子狗みよ

なるそ〳〵逆毛ある

[illegible]は首尾十分なるを
を十五年以前乃若氣の
とさゝら面か[illegible]
す[illegible]あるも[illegible]
口とあるも牛後と[illegible]
あれといつる詞[illegible]
鳥主も侍損淺すのき恐
表裏あく仕立禁しゝ心の
濃まゝはものゝ[illegible]

六十六合

撮距小荷試率行ふ隱主にて習奥
[illegible]

くい落を[illegible]

軍旗乃[illegible]聞[illegible]
書住[illegible]
かゝるの午候乃[illegible]
つもう恐[illegible]
矮駝

くい落を[illegible]

坂落平帰曹司るい主て
得と[illegible]
かゝもそ[illegible]
経をもそ[illegible]

三十騎ばかりとも見かけて落縄
梯子をつたひ落れども理りと
夜軍いかがあるべきと
のたまひければ
秘傳有りてこそ
六十七合
力尾の旗みだれて
二字ぶれ
まぢかの番てみをもく佛桜
後関引音を合を味方乃条冠
をそろへてまもるらんとみかをて

収りの舞羽を引ろ一てを起ち
おとり獅をれとも貌の一蓮
力尾の白雉をたてなみ
おもちにとくく踏ろ
関乃的矛一乃郷前ヲ
謹上再拝
六十八合
奉ま

陸奥殿乃鎧ろ
土字
犯弱心の後ろ
二字
白兄弟乃先陣後陣
教土儀苗

六十九谷

乃の里もやうる焼栗の雅峯よ
おるそろくけのつ〳〵咲乱
て寒食乃家を気つ〳〵望
身乃上いろとさをそれくり
異国乃火すむちもなる
人乃つるをもをて涙のくね
をうつ〳〵もつひのもも
去くくるる里

七十八合

一番乃勝を佐久間う吹流〳〵 甚角
五字
もゝ貝のかく次雑つ十二揃
諫鼓苔深ク治雑坊ヲ
塵静也とりつ〳〵
法令の力もあれ一番
乃条をつ〳〵隼る是ふ
例年つるあつ萬
戸関をあれ〳〵
もゝ貝十二隻〳〵貝十二つて

務員を洪て受十二のかう
勢ありて此支委細のさま
紀の夜乃千宿をて和をうる
ともを第ておなうてをかか
なんと乃司を員我橋中
ゆを知奴かい箱弓い袋お水
引をとうて鳥の跡を寶
やしてポのかうう永し
とりつる手乃後中時乃
鼓をうちおさめ奉る

鳥沙汰曰
兼安三乙年五月二日東山乃
仙洞もて雑色谷乃那なうう
公卿待従僧徒六乃心面の輩
常て祇候乃もも左右を
うかゝれ銀吹賢かなうて
第乃校中用ひい尺乃銀墓
を居て勝乃花を折ひけ
る橋樹薔薇牡丹山吹乃
作り花をかさりあて伶人
発集して春閑ある郷堂
の山乃青山乃とうとうもて

管簫を吹和琴を引ことを
嗟歎乃舞樂をおこなひて
和而方乃雜をく合ず

一番
左　右衛門督乃鳥家、無名丸
右　五條大納言乃名字、千代丸

以上十二番左勝六番
と記す哥共舞妓奥旅
絶ず如斯盃を勸む祝宴
放宴ごとくもの代乃

義談を伺ふ黄昏
おのおの退く是を此事
中御門乃左大臣殿乃仰
つたへよりて奉行人經房
朝臣書挙するも其代
乃記なり合を待ておの
なら〳〵是を給ことかまつて

花ぐもの後
唐子ども

左右總計

麗人　二句
五字　十四句
三字　十八句
二字　廿六句
雁形　五十二羽
乙　十六組

寶晉齋寫